

手には「利き手」、腕には「利き腕」、足には「利き足」があるように、目にも「利き目」があるのをご存じでしょうか。

調べ方は簡単です。二メートルほど離れた対象物を両目で見続けながら、見ている対象物を指さします。この状態で片目ずつ交互に開閉してみると、指先から対象物がずれて見える方と、ずれない方があるはずです。この対象物から指がずれない（ずれが少ない）方の目が「利き目」です。

このように、一人の人間の右目と左目でも見え方が違っているというのに、私たちは日常においてなかなか「視点を変える」ことが出来ないものです。しかし、これができるいないところに様々な不具合が生じているのも、また事実です。

例えば向かい合った相手に対し「私の真似をしてください」と伝え、こちらが右手をあげたとします。この時、相手は鏡に映った状態をイメージして左手をあげる場合と、こちらが右手をあげているから同じように右手をあげるという二通りの結果があるでしょう。その際「右手をあげている私の真似をなぜしないのか」や「真似をしてくれと言っているのになぜ反対の手をあげるのか」という思いがわきます。自分の意に添わなかった相手の反応が、責め心や怒りにつながることもあるでしょう。

このように、人間社会の様々なトラブルは、こうした行き違いによって生まれるものです。ゆえに、視点を固定化せず臨めば、たいていのトラブルは回避できるので



「視点を変える」のは 他人ではなく己自身である

はないでしょうか。相手の立場に立ってへなるほど、鏡に映るように動いて左手をあげたのか」と捉えれば、同じ右手をあげなかった相手の行動を素直に受け入れられるはずで

国語辞典によると「視点」とは、視線が注がれるところ、またものを見たり考えたりする立場とあります。後者は「観点」と言い換えることもできます。

しかし、どちらであっても変えるのであれば「自分」が変わるしかないということでは明白です。周囲が変わるのは「視点を変える」のではなく「景色が変わる」のであって、他人任せの態度です。「どう変わるのか」「いつ変わるのか」と立ち止まって、もつたいない時間を過ごすより、自らが視点を変えて前進することの方が得策です。

今年度の倫理経営講演会は「大転換！いま求められる心の経営」のテーマで開催されています。変化の激しい時代を生き抜くには、変えてはいけない不動の真理を見極め、「変えなければならぬもの」に対し、勇気を持って変えていく必要があります。

そうした「変えなければならぬもの」を見抜くには、固定化された見方を避けて「視点を変える」ことが大切です。まさに「大転換」が求められるのです。

「多面的な視点」とまではいかずとも、真逆のことを意識してみる「表裏の視点」を持つてみましょう。これだけでも、その人生はより豊かなものへと成長するのではないのでしょうか。